

# 第16回戦争社会学研究会大会

日時:2025年6月21日(土) 12:30-18:00(開場は12:00)

6月22日(日) 9:30-16:00(開場は9:00)

会場:早稲田大学早稲田キャンパス(東京メトロ 東西線 早稲田駅から徒歩5分) 16号館106教室・107教室

アクセス:<https://www.waseda.jp/top/access/waseda-campus>

開催方式:今回はオンライン配信をせず、対面のみでの開催となります。

参加費:会員 2,000円、非会員 3,000円

参加申込:PassMarket(申込ページは5月中にご案内します) ※申込締切:6月10日(火)23:59

大会参加の詳細については、必ず大会プログラムをご確認ください。

戦争社会学研究会ウェブサイト:<https://scholars-net.com/ssw/>

問い合わせ先:[ssw.plac@gmail.com](mailto:ssw.plac@gmail.com)(大会事務局)

## ◆6月21日(土)

**個人報告 12:40-15:30** 報告題目は研究会ウェブサイトをご覧ください。

106教室 司会:望戸愛果(静岡県立大学)

報告者:千葉咲希(同志社大学・院)、渡邊信洋(陸上自衛隊)、

児玉谷レミ(一橋大学)、岩田英子(防衛研究所)

107教室 司会:佐藤信吾(大妻女子大学)

報告者:加藤直(聖心女子大学・院)、高原由妃、

篠原真史(佛教大学・院)、伴野崇生(慶應義塾大学)

**トークセッション「戦死者はいかにして〈我々の死者〉たりうるか？」 16:00-18:00**

登壇者:大澤真幸(社会学者)、井上義和(帝京大学)

趣意:戦後80年と加藤典洋「敗戦後論」30年の節目の年に、社会学者の大澤真幸氏とともに、戦死者の社会的位置づけについて考えたい。大澤氏は『我々の死者と未来の他者』(集英社インターナショナル)において〈我々の死者〉という概念を軸に大変刺激的な議論を展開している。戦後80年とは、私たちが過去の戦死者との関係をうまく結べないまま経過した時間でもある。その帰結とは、またどうすれば結び直せるのか。『未来の戦死に向き合うためのノート』で戦死者の宙吊り問題を提起した井上義和が対話の相手を務める。

## ◆6月22日(日)

**個人報告 9:30-12:20** 報告題目は研究会ウェブサイトをご覧ください。

106教室 司会:清水亮(慶應義塾大学)

報告者:高橋智香(NewsPicks)、高橋奏音(お茶の水女子大学・院)、

塚原真梨佳(立命館大学)、柳原伸洋(東京女子大学)

107教室 司会:浜井和史(帝京大学)

報告者:大藪佳純(國學院大学・院)、松本昂也(立命館大学・院)、

李貞善(東京大学・院)、小林和夫(創価大学)

**シンポジウム「原爆研究を拓くー「原爆アート」を手掛かりとしてー」 13:30-16:00**

報告:岡村幸宣(原爆の凶丸木美術館)

半田颯哉(アーティスト、インディペンデント・キュレーター)

東琢磨(音楽・文化批評家)

コメント:仙波希望(札幌大谷大学)

松永京子(広島大学)

司会:深谷直弘(長崎県立大学)

趣意:2025年、原爆投下から80年をむかえる。特に前年の被団協のノーベル平和賞受賞もあり、原爆研究がより注目を集める年となることが予想される。しかし、原爆研究の対象と方法については、どこか“お馴染み”のものになってきたように感じられることがしばしばある。つまり、原爆に関わる対象(被爆者の語りであったり、モニュメントであったり、メディア表象であったり…)と、方法(ライフストーリーであったり、歴史社会学であったり、言説分析であったり…)が、どこか固定化され、“なんとなく予想ができる”ものになっているのである。

無論、これは原爆研究の豊かな蓄積に因るものであり、従事してきた研究者たちに最大限の敬意が表されるべきである。だが、本シンポジウムでは、それら“お馴染み”の原爆研究の対象と方法をなぞるというよりは、新しいフィールドを積極的に開拓してみたい。いわば、“原爆×〇〇”を提示する試みである。特に本シンポジウムでは、“原爆×アート”の領域を(手探りながら)開拓してみたい。

周知のように、多くのアーティストによって原爆をめぐるアート実践が試みられてきた。丸木位里・丸木俊の大作「原爆の凶」は国内外で衝撃を与えた。近年の例を挙げるなら、広島をフロッタージュの手法で擦りとり、広島を記憶を掬い取る、岡部昌生のアート実践や、Chim↑Pomの原爆に関する一連のパフォーマンス活動「広島！」展、また被爆者の証言をデータ化・数値化した「声紋」を無数になぞり、書写して作品化した竹田信平の「α崩壊」などである。

こうした「原爆アート」とも言うべき様々な実践については、これまで戦争社会学が十分に受け止めてこなかった分野である。「原爆アート」は社会に何をもちたらし、どのような展開を見せてきたのか。実践者からの報告や、現場での観察、研究者による考察を通して、原爆をめぐるアート・表現・情動などの観点から戦後史と現在を再考し、原爆研究に分け入る試みとしたい。そうすることで、本シンポジウムが、原爆投下80年の節目の年に、原爆研究の“未来”を拓く一端となれば幸いである。